

おはなし散歩道

じいさまの星

町田市 大澤桃代

今朝、じいさまが死んだ。タヌ吉にとっては親代わりだった。じいさまは群で一番の物知りだった。餌の在処、イヌワシの森、車の怖さ、生きる術のほとんどを教えてくれた。

みんなが泣いた。タヌ吉も悲しかった。でも、涙は見せられねえ、と我慢する。じいさまはめそめそするのが嫌だった。タヌ吉は群一番の泣き虫で、心配ばかりかけていたのだ。

生き物が亡くなるに星になるだよ。教えてくれたのも、じいさまだ。ならば、どこかに新しい星があるはずだ。探しに行くべえ、とタヌ吉は日暮れの山道を行く。じきに星が出る時分だ。高い峰を目指して走る。

広がっている。明るい金星、白鳥座、は見つけられたが、じいさまの星がわからねえ。新しい星には印があるのだろうか。じいさまには長くて光るヒゲがあった。ヒゲのある星だろうか。

タヌ吉は星を見てゆく。一つ一つ見てゆけば、いつかじいさまの星にたどり着くだろう。あつ！と、タヌ吉は目を丸くする。

星が流れたのだ。星は長い光の尾を引いて遠くの谷へ落ちた。ヒゲみてえな光の尾だ。あれが、じいさまの星に違えねえ。

行ったことのねえ山だが、タヌ吉はまた走る。篠竹の藪を抜け、岩場を下る。谷は切り立った崖になっている。谷底に光る物が見えて、急ぎ谷を下る。



そういえば、朝から何も食ってねえ。

すげえ！

タヌ吉は目を見開く。月明りのもと、山吹色の木苺が鈴なりになっていたのだ。天の川が、そっくり落ちてきたみてえだ。里じゃ盛りを過ぎた実も、谷では今が食べ頃だった。

タヌ吉は夢中で食む。口中でぶつぶつと実が踊る。食えるだけ食って、ようやく気がつく。じいさまを追っかけてこまで来た。

木苺はタヌ吉だけの物じゃねえ。じいさまが新しい餌場を示してくれたのだ。天に昇る前に教え

てくれたのだ。

タヌ吉は木苺の枝を引きちぎる。何度も繰り返す。口いつべえに枝をくわえる。

棘なんか痛くねえ。群に持つて帰るのだ。谷を登り藪を駆け上がり、峠を越える。タヌ吉道をつくれば、住処はもうすぐそこだ。

みんなの驚く顔がある。タヌ吉は胸を張って言う。「じいさまの木苺だ」と。どこからか、じいさまの声が聞こえる。「タヌ吉、大きくなったな」と。

(挿し絵・小出 茂) (完)

高尾山物語 ③

行基菩薩薬師像奉安

絵・橋本豊治



医王像を手刻して之を奉ず。寺に名付けて有喜と曰う。院に名付けて薬王と曰う。寛延の高尾山縁起より

寛延の高尾山縁起より

高尾山薬王院の「薬王」とは、薬師瑠璃光如来という仏様を意味します。薬師如来と呼ばれることも多いですが、大医王という別名もあります。名前の通り医薬の仏様として信仰を集め、飛鳥時代から奈良時代にかけて、薬師如来を御本尊とした寺院が多く建立されました。行基菩薩は高尾山を東国鎮護の霊場として開山され、自ら刻んだ薬師像を奉安されたと伝わっております。

明るい顔で 人々接し 真心こもる おもてなし

江戸消防記念会 第十区高尾山高聲會 木遣塚祭

六月十七日(日)



- | | | |
|-------------|--------------|-----------|
| 高尾山報助成金志納者 | 御芳名(順不同・敬称略) | 足立区 中山 恵司 |
| 越谷市 五戸 順子 | 八王子市 櫻崎 ヨシ子 | |
| 新座市 彰山 粧麗 | 八王子市 佐藤 光 | |
| 世田谷区 大藪 龍子 | 草加市 峯尾 好生 | |
| 足立区 伊藤 和子 | 日野市 馬場 收 | |
| 太田市 藤田 剛吉 | 飯能市 関下 正一郎 | |
| 草加市 小河 浩満 | 桶川市 関根 章 | |
| 八王子市 小池 まり子 | 前橋市 前橋 睦講 | |
| 東上留米市 但馬 憲 | 伊勢崎市 佐々木 晋介 | |
| 新座市 高橋 久子 | 東筑摩郡 竹内 政男 | |
| 足立区 鈴木 智恵子 | 八王子市 石田 博司 | |
| 柏市 高下 秀子 | 富里市 森 照森 | |
| 加須市 塩崎 君子 | 府中市 金子 操 | |
| 八王子市 小澤 為明 | 八王子市 寺田 元信 | |
| 新潟市 長谷川 貴一 | 北本市 衞茂 手木 | |
| 川口市 川田 忠雄 | 足利市 須藤 サト子 | |
| 八王子市 荻部 栄寿 | 伊東市 大江 弘 | |
| 立川市 長谷川 修康 | さいたま市 原田 友光 | |
| | 高尾山健康登山者一同 | |